

沢村貞子著「わたしの脇役人生」新潮文庫、新潮社 1990年6月25日刊を読む

## わたしの脇役人生

### 1. (1) 「女が学問なんかすると嫁にゆけないよ」

そう言って苦い顔をする父を口説き落として女学校から女子大へいった頃は、なぜか女教師になると決めていた。ちょっとしたことでその夢が破れたあとは、乙女心のたよりなさ……新劇運動にとびこんだり、治安維持法にふれ、あげくの果に挫折して——とうとう、京都に住む兄の手引きで映画女優になってしまった。昭和九年——芝居ものの娘の自立の道は、まことに安易なものだった。

(2) 時代劇スターになっていた兄は、不肖の妹のために何やかや力をかしてくれたけれど……職業として女優を選んだだけの私は、最初から夢も希望ももっていなかった。役者としての才能もスターとしての花ももっていないことは自分でよく知っていた。年齢をとっても、何とかひとりで食べてゆけるために……脇役になりたい、と望んでいた。

(3) 結局、時代劇の武家娘のカメラテストに失敗して、百円貰えそうだった月給が、六十円になったけれど、私は別になんか気がしなかった。当時の女学校教師の初任給と同額だったし、その方が気が楽だった。それより、自分に向かない仕事につくのだから、他人の五倍は努力しよう、それでないと月給泥棒になってしまうから……そう心の中で決めた。

(4) 兄の心づかいが肩に重くて、間もなく東京の現代劇部へ移して貰ったが、撮影所側から与えられた役は——女学生、令嬢、酌婦、妾、女教師、芸妓など文字どおりなんでもやだった。丁度、無声映画からトーキーに切りかわる混乱期で、標準語が無難につかえる、というだけで、私はむやみに忙しかった。

(5) 二本だて映画の前座——添えものの主役を何本かやらせられたあと、とうとう、制作部長に、脇役をさせて戴きたいと申し出ると、大声で怒鳴られた。

「お前は役者の家に生れたくせに、主役がいやだとは何ごとだ。脇にまわって、ちょっと出て、楽に食ってゆこうなんて——恥ずかしいとは思わんのか……」

芝居ものの家に育ったからこそ、この世界のきびしさや自分の無力さを知っているのに——わかってくれなかった。

2. (1) 脇役はむずかしい。華麗な花のスターの動きに従って、うしろや横からほどよく枝を出したり葉を茂らせたり、目立たないように散っていったり……そんな芸が簡単に身につくはずはないけれど、いまからすこしずつ覚えてゆきたい——そう思っていたのだけれど……。

怒られても笑われても、脇役志願をつづけるうちにどうやらそこへ定着した。添えものの映画

の主演の出来がパツとしないせいもあったと思う。

(2)ある日、撮影所の食堂で、カメラマンに手招きされた。巨匠とばかり組んでいる人で、私など口をきいたこともなかったのに……。

「映画スターというのはね、あちこち動くんだから、どこからみても美しい顔をしていなければいけないんだ、ホラ、長谷川一夫さんや田中絹代さんみたいにね。正面が百点満点でも、左横顔が九十点、右横顔が八十点というのはだめ。同じ二百七十点なら、正面も右も左もすべて九十点の方が、まだましさ」

それだけ言ってスーッと行ってしまった。

(3)家へ帰って、鏡台の前へ坐り、手鏡をとって、つくづく自分の顔を眺めた。

正面は——まあ、色の白いが七難かくして、どうやら七十点はつけられるが、おでこだし、鼻の先がちょっと垂れているから、横顔は左右とも五十点というところか……なるほど、お金をとって見せられるような顔ではない。つまり、私の脇役志望は、その意味でも正論だということを、あのうるさ型のカメラマン先生が認めてくれたということかしら、とひとりニヤニヤ笑ってしまった。

(4)それからもう、五十年あまりになる。めまぐるしく移り変わる芸能界で、決して上へあがらず、と言ってひどく落ちもせず……宙に浮く格好で、なんとか真中ごろにぶら下っているとは我ながら呆れる——よくやるよ。

(5) 七、八年前だったか、昔の大スターがテレビ局の私の個室をそっとのぞいた。

「この間から、あなたに逢ったら是非おすすめしようと思っていたの。だまされたと思って、この薬をおでこに貼って寝てごらんなさい。眼の下でも首すじでも……ふしぎに皺がなくなるの——ホントよ」

薄い紙包みを私の<sup>てのひら</sup>掌にのせながらやさしくウインクする顔は、成程、今も色っぽい。

有り難く<sup>あ</sup>いただいたその妙薬は、その晩、わが家の鏡台の引き出しにしまったが——いつの間にか紛失してしまった。せっかくのご好意は<sup>うれし</sup>嬉しいけれど、彼女と私では大体、顔の造作が<sup>のこ</sup>違う。残<sup>のこ</sup>りの色香はあの人にこそ大切だけれど、私にとっては無用の長物。いまや、皺は老脇役女優の商売道具——一本いくら、と申し上げたいくらいのも。高齢化社会のおかげで老女役の数も多い。鈍りがちの記憶力をふるいたたせて台詞をおぼえ、開始時間はキチンと守って、車が<sup>こ</sup>混んで……などという言い訳をしないで——若い人たちのすることがまだるこしくてもじっと我慢して、いや味など言わないようにすれば——もうしばらくは脇をつとめることが出来るかも知れない。そうしたい、と思っ<sup>て</sup>てはいるけれど。

もし、役者を廃業することになっても、私の脇役人生はやっぱりこのまま続くだろう——<sup>いのち</sup>生命あるうちは……。

3.(1)毎日の暮らしの中でも、ちょっと一足だけ、うしろに下がっているのが、私のような下町女の癖である。これは多分、自分をよくみつめ、自分の力を買いかぶらないせいで——従って、大げさなお世辞にのせられることもないけれど——むやみにおだてられたりすると、つい、照れて、しらけて、プンと横を向いたりするところは——可愛げがなさすぎる、とときどき反省している。

(2)なにしろ昔は、何かにつけて「女のくせに」と言われたし、ことに私はおまけ育ちだから、どうしても人のうしろにいる方が落ちつく。そこに坐りこんでいると、眼の前の光の中で浮き浮きとはしゃいでいる人たちの心の中がとてもよく見えて、面白い。

(3)フン、いい気になって……などと意地悪な笑いに口をゆがめているうちに、フト、  
(ところで私はどう思っているかしら)

と急に気になって、あるとき、その光をチョット借りて、わが心の中をのぞきこんだら——何ということか、私も相当はしたなく見苦しいことがよくわかった。以来、恥というものを知り、おかげで今日まで生きてこられた。

4.(1)「いいことは自分のせい、わるいことは他人のせい」

などと甘ったれていたら、とても人間らしくは生きられない。性格や境遇、考え方も感じ方もそれぞれ違う人たちがひしめきあっている世の中である。自分にとって少々ぐらいいいやなこととは、黙って我慢しなければ、なかなか平和に暮らせない。ただこれだけは、どうしてもいやだと思ふことは、しないようにしなければ……決して、しないように……。

(2)残りの人生をそんなふう生きてゆくためには——目立ちたがらず、<sup>ほ</sup>賞められたがらず、齢にさからわず、無理をしないで、昨日のことは忘れ、明日のことは心配しないで、——今日一日を丁寧に——肩の力を抜いて、気楽にのんきに暮らしてゆこう。

(3)私の脇役人生はこんなところだと思うけれど——もし、<sup>ほ</sup>呆けて調子が狂って、みなさまにご迷惑をかけたなら——お許し下さい。

[コメント]

名脇役女優、沢村貞子さんをなつかしく思い出す人は多いが、このような気骨をもって俳優人生を歩んでいたことを知る人は少ない。

演劇に興味のある人は新潮文庫で手に入る間に入手し、できるだけいねいに沢村さんの文章をお読みになって頂きたい。日本演劇界の宝物の一つであると私は考える。

ニューヨーク・ヤンキースを優勝に導いた松井秀喜選手も礼節を知る人で、現代における代表的日本人であるが、この沢村さんの脇役人生も日本人の生き方を示してくれる。

- 2009年11月7日林明夫記 -